



好きだと

あずま渡里



好きだと

あずま渡里

違う好きだと思つた

「十二年後の明日、二十四日の夜六時に武蔵神社で待つてます……その時まで、連絡出来ません」
「……解つた」

俺がそう言うのと、蘭君は何も言わずに渡していたスベアキーをテーブルに置いて、家を出て行つた。振り向きすらしなかつた蘭君に、寂しくもありがたいと思つたところで、俺の目からは一筋、二筋と涙がこぼれた。

（嫌われるのが解つてて会う約束するとか、どんだけ未練がましいんだろ？）

そうは思うし、そもそも蘭君は来ないだろうけど——万が一、億が一で来ても間違ひなく嫌われると思う。

（だつて、蘭君が好きなのは『大人っぽくて、自分を甘やかしてくれる』俺だから）

だから今の、中身は二十六歳の俺は好かれてるけど。十二年後、年相応になつた情けない俺じや駄目なんだ。

※

今回のタイムリープは、何故か十八年前まで戻ることが出来た。

だから俺は真一郎君や赤音さんを救い、稀咲と何とか仲良くなり、三途君には怪我をさせずイザナ君を佐野家と和解させ——ほぼ皆を救えた俺へのご褒美なのか何なのか、父親が北海道に転勤することが決まつた。

そして東正の解散と、タイムカプセルを埋めるのを見届けたところで——急にいなくなり、マイキー君達が闇堕ちしたら困るので皆には引越すことと、迷つたが今の俺が2017年からタイムリープしてきたことを伝え、俺が未来に戻つたら『花垣武道』からは今までの記憶が無くなることを伝えた。

「だから、ここでお別れです。これから、未来に戻るんで……皆が、素敵な大人になってるのを楽しみにしてますね」

武蔵神社には東正の皆とイザナとカクちゃん、あと真一郎君や太寿君達黒龍メンバーに来て貰った。嘩然としたり泣いたりしながらも、どこか思い当たる節があったのか引き止めずにいてくれた。そして俺のタイムリープについては内緒にし、タイムカプセルを掘り起こす日に再会することを約束して別れた。

ちなみに元々の俺とは、未来を確認するのに何度か戻った時（不思議と、戻る未来は2017年以降だった）に、交換日記をして情報共有している。何度もタイムリープする中、言葉足らずだったことで闇堕ちを引き起こしたことがあったからだ。

（父さん達は、一足先に北海道に行ったし……あとは俺が、未来に戻ったら終わりだな）

……そう思っていたんだけど、その後、思いがけないことが起こった。

存在こそ知っているが、タイムリープの中でほとんど接点のなかった人物。それが灰谷兄弟だ。

そんな兄弟の兄の方である蘭君は、関東事変——という名の、まさかの俺の争奪戦が引き分けになり、結果として死者も逮捕者も出ずに終わったので、ほぼ関わりがないままだった。

だけどタイムカプセルを埋め、タイムリープについてカミングアウトした日、直人のところへ行こうとしたら、何故か一人で来た蘭君に呼び止められた。

「……あの、何の用ですか？」

「ああ、責任取って貰おうかと思って」

「へ？」

「天竺、解散して大将が会社興すことになったんだけど……毎日、忙しくて俺、寝不足なの。そんな訳で、お前

ん家で寝かせろー?」

「何ですか!? 家とか、それこそ六本木のカリスマなら高いホテルの部屋とか、どこでも行けるじゃないですか!」

「……竜胆は取り巻き集めて遊ぶのが、ストレス解消法だからうるせーけど止められねーし。下手に外で泊まると、馬鹿な女が押しかけて来んだよ」

「これだからイケメンは! 仕方ないから、泊めますけど……俺、引つ越すんで二十二日の夜までしか力になれませんからね!? あと眠れないのは辛いでしょうから、今夜寝心地悪かったら我儘言つてないで、他のところ探しましょう! 俺も、探すの付き合いますからっ」

ついツツコミを入れながらも、眠れないのは大変だから引越しの朝までは面倒見ようと思つて頷くと——見下ろしてくる紫の瞳が、驚いたように見開かれた。次いで、何故だが笑みに細められたかと思うと「アハ」と声を上げて笑つて楽しそうに言葉を続けた。

「お前、本当に中学生? いや、見た目はガキだけど、随分と面倒見良いのな?」

「……ハハ」

「気に入つたよ、武道♡ 引つ越すまで、よろしく。あ、俺のことも下の名前で呼べな—」

「……蘭、さん?」

「他人行儀。やり直し」

「他人ですからね!? じゃあ、蘭君で—」

「よ—し♪」

ゴリ押しに頷いたのは、社会人の先輩として睡眠不足は本当にしんどいを知っているからと今日、両親が旅立っているんで今は一人なのと——急に距離を縮められたのに「またか」と思つたからである。

タイムリープの中で気づいたが、どうも中身が大人な俺に周りの面々は心配になるくらい甘えてくるのだ。最初は戸惑ったが、変に反発されるよりはずっと良いので、今ではそのままにしている。

(また俺の兄貴力に、メロメロにされたか)

そう思い、俺は蘭君を家に連れてきた。そして風呂に入れ、小腹が空いたという彼にお茶漬けを作り——ぐつぐつ眠れるよう、ベッドを明け渡してソファで寝ようとしたら、何故か俺までベッドに引きずり込まれた。

「俺、冷え性なんだよね。そんな訳で、湯たんぽ代わりな♪」

「えー……仕方ないですね」

それなら何故、上半身裸で刺青を見せつけているのか解らないが、嘘をつく理由もないので俺はされるがままになっていた。

……結果、次の日の朝に俺は起きたが、蘭君は眠ったままで。

仕方ないのでベッドから抜け出し、朝食としてトーストとオムレツとサラダを作った。今の俺は兄貴力の一つとして、料理など家事一般は出来るようになっていた。

そして一緒に、スベアキーと『他のところに泊まりに行くなら、ポストに鍵を入れておいて下さい』と書いたメモを残して、俺は学校へと向かった。

「お帰りー」

「……ただいま、蘭君」

「夕飯、適当に買って来たぞー。あと、風呂も用意してるー」

「え!? ありがとうございますっ」

正直、戻って来ないと思ったが予想に反して、学校から帰ってきた俺を蘭君は出迎えてくれた。

それだけじゃなく食事も、あと風呂も用意してくれていて——更にテーブルで、向かい合って「いただきます」と言って食べようとしたら、何故か微笑まじげに見つめられた。

「良い子だな、お前」

「え？」

「何でもない。あ、朝飯ありがとな。美味かった。イタダキマス」

言い慣れてないのか「イタダキマス」は少しぎこちなかったが、その前にさらりとお礼を言われたのに心臓が跳ねた。

そんな俺には構わず、その日の夜も抱き枕にされて——意識すると、蘭君にとつてはただの甘えだろうけど、だんだん彼のスキンシップが辛くなってきた。いつもとは逆に、労って貰ったことで簡単に恋に落ちた自分の、あまりのチョロ口に頭を抱えた。

(勘違いするな、俺……お兄ちゃんな蘭君は、甘やかしてくれる大人な俺が好きなんだから)

そう自分に言い聞かせて気持ち悟られないように、とにかく蘭君の安眠を心がけてきた。おかげで元々、イケメンだが肌艶も髪艶も良くなり、ますますイケメン度が上がった。

見惚れないように気をつけつつ、最後の夜を過ごして次の日の朝、つまり今朝に「蘭君、お元気で」と伝えると何故だか不思議そうに聞かれた。

「何でそんな、最後みたいな言い方するんだ？ 流石に、引越し初日は電話とか無理だろうけど、メールくらいは出来るだろ？」

「……え？ 何ですか？」

「何で？ 恋人なんだから、当然だろ？」

「は!？」

「俺こそ『は?』だわー。一週間、同じベッドで眠ったら恋人だろー?」

とんでもない内容に思わず声を上げると、更にとんでもないことを言われた。しかし心を鬼にして、俺は蘭君に言った。

「勘違いさせたなら、ごめんなさい、蘭君。俺、今日北海道に引越すんです」

「だから? それで何で、別れなくちやなんねーの?」

「遠距離なんて俺、無理です」

「俺もそう思ってたけど、やってみねーと解んねーだろ? 抗争の時はあれだけしつこかったのに、俺のことは

んな簡単に諦めんのかよ?」

「ずっと家族に心配かけたから、北海道では親孝行したいんです。だから、俺からは連絡出来ません」

「……じゃあ、やつぱり別れなくていいーじゃん。お前が連絡出来るようになったら、また会えばいい。いつなら、連絡出来るの?」

それらも理由の一つだが、一番は年齢補正されたメツキが剥がれるからだ。けれど、六本木のカリスマの思わぬ粘りに、俺は「どうにでもなれ」という気になって口を開いた。

「十二年後の明日、二十四日の夜六時に武蔵神社で待ってます……その時まで、連絡出来ません」

「……解った」

俺がそう言うと、蘭君は何も言わずに渡していたスペアキーをテーブルに置いて、家を出て行った。振り向きすらしなかつた蘭君に、寂しくもありがたいと思ったところで、俺の目からは一筋、二筋と涙がこぼれた。

(嫌われるのが解ってて会う約束するとか、どんだけ未練がましいんだろ?)

そうは思うし、そもそも蘭君は来ないだろうけど——万が一、億が一で来ても間違いないと嫌われると思う。(だって、蘭君が好きなのは『大人っぽくて、自分を甘やかしてくれる』俺だから)

だから今の、中身は二十六歳の俺は好かれてるけど。十二年後、年相応になった情けない俺じゃ駄目なんだ。……でも一方で、別れたくないと言ってくれた蘭君のことを信じたくて。

俺は蘭君とのことを手紙に書き、何かあつた時の為に貯めていた小遣いの中から、東京に来る飛行機代と一緒に残した。未来に戻るのは終業式のある今日、二十三日だけまだ北海道にいたら移動があるので、二十四日にした。

そして終業式の後、今回は付き合わず友達になつていたヒナと弟の直人に会いに行き——気を遣われないようにタイムリープについては言わず、引越しの挨拶の体で直人と握手し、俺は未来へと戻つた。

※

目覚めたのは家じゃなく、知らない天井——なだけじゃなく、ホテルみたいに綺麗でベッドが大きいんだけど、誰かの家みたいだった。

状況が解らず荷物を探すと、リュックから昔の自分との交換日記が出てきた。しかも続きが書かれていたんで読んでいき、マイキー君とイザナ君と大寿君がそれぞれ会社を、元東亶と元天竺とココ君は各総長の会社に入り、イヌピー君は真一郎君のバイク屋に勤め、日向と直人は看護師と刑事になつたと書いてあつたのに、俺は泣きながら呟いた。

「よかつた……ミッションコンプリートだ！」

そう言えば蘭君も、イザナ君の会社に入ったと言つていた。寝不足だつたのが少し気になるが、先に自分がど

うなつたかを確認しよう。

そう思い、交換日記を読んでいくと俺は札幌の高校と専門学校に入り、何とレンタルビデオ屋じゃなくスープカレー屋のキッチン担当になっていた。そして蘭君との約束を果たす為、有休を取って二泊三日で東京に来たのだと。

「すごい。レシピメモもある。ありがとう、俺……って、ん？」

タイムリープ前の俺よりもしつかり働いている上、フオローも完璧な俺にお礼を言っつて続きを読んでいた俺は、けれど思わず声を上げることになる。

『灰谷兄弟は、モデルと格闘家になつてる。モデル兄は、事ある事に恋人匂わせてるけどあれお前？ あと東京着いたら、灰谷弟に捕まつて家に連れ込まれた』

「……情報量がつ、多いっ！」

「うわ、本当に武道だ……竜胆、ありがとなー♡」

「どう致しまして。んじゃ俺、練習行つてそのまま泊まつてくるから」

「おー。一応、明日帰つてくる時は連絡してなー」

「へーへー」

どこからツツコミを入れていいか解らず、とにかく叫ぶと——部屋のドアが開いて、色が変わつた髪を切り大人びた、スーツ姿の蘭君が入ってきた。

そしてドアの向こうにいて声しか聞こえないが、おそらく弟の竜胆君と話をし、ドアが閉まる音が聞こえたところまで再び俺を見た。

「……あのっ！ 何か前倒しで、しかも自宅に押しかけてすみませんっ」

「んー？ 謝ることねーよ？ 竜胆がお前を連れてきたのは多分、俺が仕事明けで寝不足なの気使つてくれたん

だし。つてか」

咄嗟に謝つた俺を、そこは昔と変わらない紫の瞳がジツと見つめてくる。

小物な俺が、見透かされるのが怖かつたくせに——それよりも綺麗だったから、俺は真っ直ぐに見返した。するとパツ、と音がする勢いで蘭君は破顔して言った。

「みーつけたー」

「え？」

「大人ぶつてて、馬鹿みたいに頑固で、全部守ろうつて頑張つて……だけど実は滅茶苦茶、甘えたがりで弱虫な、泣き虫野郎」

「……悪口、ですか？」

「いや、俺の惚れたお前の話♡」

「惚れっ!？」

「ホントは甘やかして欲しいくせに、立ち止まりたくないって我慢しやがつて……我が儘だよなー? でも、ちゃーんと蘭ちゃん待つててやったから。遠慮しないで、甘えろー?」

「あ……っ」

言葉に遠慮も容赦もないが、俺の左頬を撫でる手はひどく優しくかった。

(違うつて決めつけてたけど、蘭君は大人な俺じゃなく……ちゃんと『俺』を見ててくれたんだ)

気づけば俺は、ダムが決壊するくらいの勢いでポロポロと涙を流した。

そんな俺の涙を、蘭君は指や唇で拭ってくれて——最後は涙で濡れた唇に、何度も何度も口づけてくれた。

好きだと

発行日 2022年12月18日

著者 あずま渡里

<https://www.pixiv.net/member.php?id=3229042>

連絡先 contact@rainbow.sakura.ne.jp

印刷 シメケンプリント / かんたん表紙メーカー

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
